

奈良世界遺産巡り 2013

右城 猛

1. まえがき

11月3日と4日の連休を利用して奈良観光の定期観光バスで世界文化遺産巡りをしてきた。初日は、東大寺、春日大社、興福寺と若草山頂の半日コース、二日目は法隆寺、中宮寺、慈光院、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡の一日コース。

奈良は、平成20年3月に仕事で来たとき、(株)ライトの下村修一社長に法隆寺を案内してもらっていたが、それ以外は初めて。

春日大社権宮司の岡本彰夫氏が書かれた「日本人だけが知っている神様にほめられる生き方」を読んで奈良に行きたいと思っていた。

2. 東大寺(世界遺産)

東大寺は、奈良時代に聖武天皇が建立した寺。「奈良の大仏」として知られる盧舎那仏(るしゃなぶつ)を本尊としている。盧舎那仏とは大仏様のことである。

2度の兵火で多くの建物を焼失した。現在の大仏殿は18世紀初頭(元禄時代)に再建されたもの。

東大寺は1998年に古都奈良の文化財の一部として、ユネスコの世界文化遺産に登録されている。



東大寺の境内に入ると、奈良公園の鹿が出迎えてくれた。



国宝の南大門。屋根裏まで達する大円柱が18本ある。門の高さは基壇上25.46m。わが国最大の山門。



金剛力士立像

門内には高さ8.4mの巨大な木造金剛力士立像(国宝)が二体安置されている。門に向かって右が吽形(うんぎょう、口を閉じた像)、左が阿形(あぎょう、口を開いた像)。阿形像は運慶、吽形像は定覚および湛慶がそれぞれ小仏師12人と共に造ったもの。

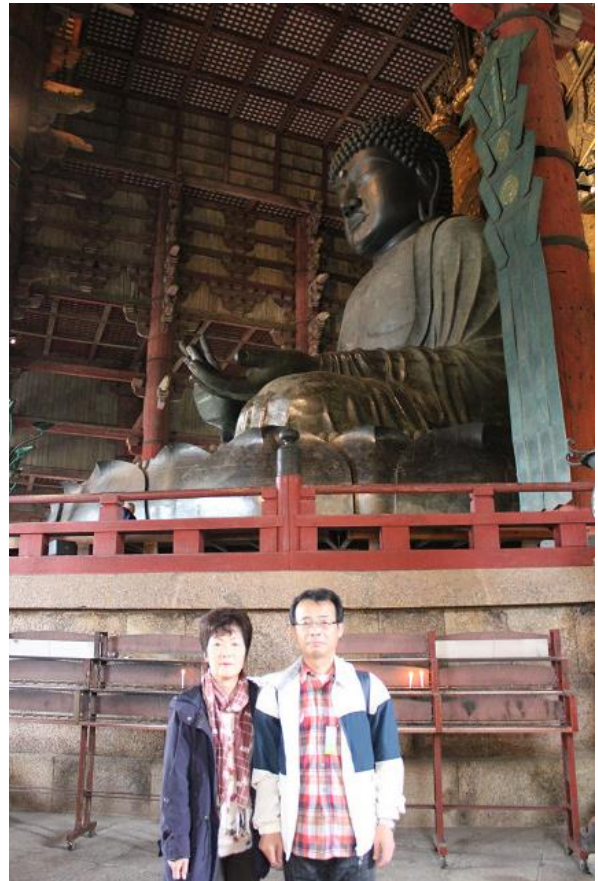
「阿」は口を開き、「吽」は口を閉じて発する声のことで、そこから「呼気」と「吸気」の意味となり、両者が息を合わせることを「阿吽の呼吸」と言うようになった。



大仏殿から見た中門（重要文化財）。観光客が群がっている灯籠は、国宝の金銅八角燈籠。



国宝の金堂（大仏殿）。ここに東大寺の本尊である大仏様を安置している。



大仏様の高さは約 14.7 メートル、基壇の周囲は 70 メートル。頭部は江戸時代、体部は大部分が鎌倉時代の補修である。



大仏様



大仏殿の北東「鬼門」のど真ん中の柱に、大仏の鼻の穴の大きさと同じ、高さ 30cm、幅 37cm、長さは 120cm の穴が開いている。穴をくぐると厄除け以外にいろいろな御利益がある。



重要文化財の虚空蔵菩薩像(こくうぞうぼさつぞう)。宇宙のように無限の智恵と慈悲を持った菩薩。智恵や知識、記憶といった面での利益をもたらす菩薩とされている。



広目天像。四天王の一体で、西方を護る守護神。尋常でない眼、つまり千里眼を持つ守護神。



東大寺を出ると、平城京天平行列に出会った。2006年に始まり、春のゴールデンウィークに開催されていたが、今年からは11月3日の文化の日にも開催されるようになった。

東大寺を建立した聖武天皇及び光明皇后と従者の貴族の華やかな一団が、13時にJR奈良駅を出発し、三条通りを通っておごそかに東大寺を訪れるというもの。



東大寺では、布作面(ふさくめん)を被った人々が舞を披露。



平城京天平行列



平城京天平行列



燈籠に火が灯される万燈籠の時、3000 円出せば紙に願い事を書いて奉納する献燈ができる。

石燈籠を寄進するには、制作費、奉納のお祭り、管理費などで 250 万円以上が必要。



150 円で買った煎餅に群がる奈良公園の鹿。

3. 春日大社(世界遺産)



日本で唯一、夫婦神を祀った「夫婦大国社」。縁結びや夫婦円満に御利益がある。ピンクのハート型の絵馬に 2 人の名前を書くといつまでも仲良くいられる。



2000 基の石燈籠があり、2 月の節分と 8 月の中元の夜のみ、全ての燈籠に火が灯される。



色鮮やかな朱塗りの回廊と 1000 基あると言われる釣燈籠。



春日大社の中門(重要文化財)と釣燈籠



春日大社本宮の清浄門から出る。



春日大社の境内にはたくさんの大きな藤のつるがある。



樹齢 1000 年と言われる本社大杉(ほんしゃおおぎ)。大杉の根元から直会殿(なおりいでん)の屋根を通して伸びる樹は、イブキ。



春日大社の神の使者である鹿が口にくわえた筒から水を出している手水舎



釣燈籠

4. 興福寺(世界遺産)

興福寺は、藤原鎌足と藤原不比等(ふひと)ゆかりの寺院。国宝の数 45、重要文化財の数 45、県指定文化財の指定が 3 と、数多くの日本の宝がある。2010 年には創建 1300 年の節目を迎えた。



東金堂と五重塔



中金堂は再建工事中



813年創建の南円堂(重要文化財)。八角堂としては、日本で一番大きい。

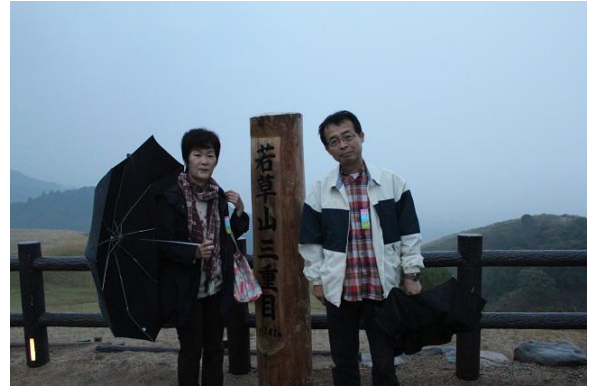


興福寺宝物収蔵庫として1959年に建立された国宝館。

仏像彫刻をはじめ、絵画や工芸品、考古資料や典籍文書など、すぐれた作品を展示している。

3つの顔と6本の手を持つ国宝の阿修羅像が最も有名。

5. 若草山



奈良公園の東端に位置する標高 342m の若草山。山頂から見る奈良の夜景は、新日本三大夜景のひとつであるが、霧で見えなかった。

若草山に登る途中に三笠温泉郷があり、かの有名な奈良万葉若草の宿「三笠」がある。



展望台から駐車場への道は暗い



近鉄奈良駅前の行基広場。行基像が東大寺の方を向いて立っている。東大寺の大仏建立にあたり、資金集めに才能を発揮した。東大寺の「四

聖(ししょう)」の1人。

夜の食事は、この近くの創作料理の居酒屋「八宝(はっぽう)」。安くて上手い。日本酒や焼酎の種類が豊富。大満足であった。

6. 法隆寺

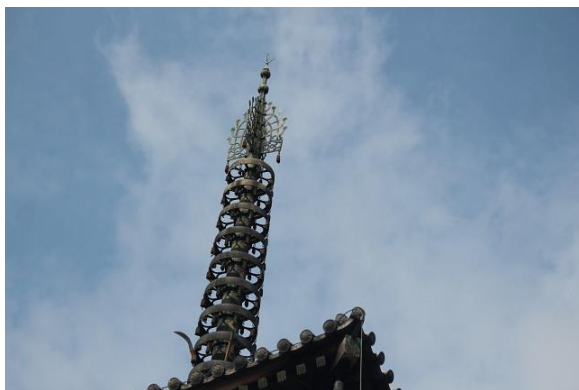
斑鳩寺(いかるがのてら)とも呼ばれる法隆寺は、薬師如来を本尊として 607 年(推古 15 年)に推古天皇と聖徳太子によって建造された世界最古の木造建築である。



南大門



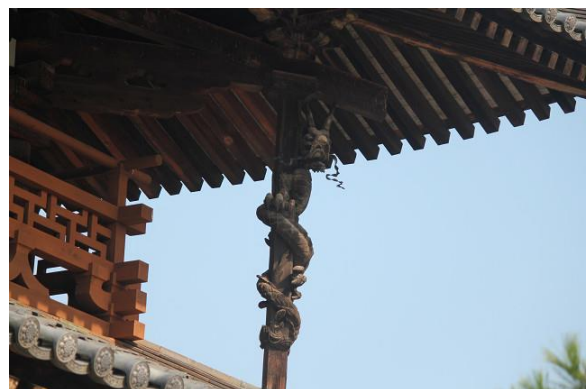
中門(ちゅうもん)と五重塔



五重塔の相輪。九輪に鎌が4本刺さっている。これは落雷防止を祈願したもの。



五重塔は最古の塔。高さは 31.5m。塔高の $\frac{3}{2}$ が塔身で $\frac{1}{3}$ は相輪の比率となっている。



屋根を支える支柱。登り龍の彫刻が施されている。元禄の修理のときのもの。



下り龍の彫刻がある支柱。



世界最古の木造建造物として有名な金堂。聖徳太子のために作られた金銅釈迦三尊像など法隆寺のご本尊が安置されている。

周囲の壁面には世界的に有名な壁画(昭和24年焼損、現在はパネルに描かれた再現壁画)が描かれている。

普段は非公開であるが、この日は運良く特別公開されており内部を覗くことができた。



平成10年に完成した大宝蔵院。有名な夢違観音堂(白鳳時代)、玉虫厨子(飛鳥時代)、九面観音像などわが国を代表する宝物類が多数安置されている。



中門東寄りにある鏡池の岸には、正岡子規が明治28年10月に松山から東京へ行く途中、ここに立ち寄った。その際に詠んだ俳句「柿食えば鐘なるなり法隆寺」が、句碑になって建てられていた。



東大門に行く通路の桜の葉が紅葉していた。
紅葉が ひらひら落ちる 法隆寺
参道に 紅葉落ちけり 法隆寺
モチノキが 赤い実をつけ 法隆寺
駄句を口ずさむ私に、妻はあきれた様子であった。俳句がまったくわかっていないと馬鹿にされた。



法隆寺にはいろいろな手水舎(てみずや、ちようずや)がある。これは、東院の手水舎。



聖徳太子を偲んで 739 年に建てられた上宮王院の中心にある夢殿。



聖徳太子等身の救世観音像(飛鳥時代)が安置されている。



中宮寺。聖徳太子が母后穴穂部間人皇女(あなほべのはしひと)のために建てた寺。現在

の本堂は、高松宮妃殿下の御発願により吉田五十八の設計により昭和42年に再建された。



昼食は、法隆寺の門前の食堂で、「餅入り柿うどん」を食べる。家内はデザートに「柿ソフトクリーム」も注文。この店では「柿の葉すし」も売っていた。

7. 慈光院



1663 年に当地の大名であった片桐貞昌(石州)が、父貞隆の菩提寺として建立した臨済宗大徳寺派の寺院。

片桐石州は徳川四代将軍家綱をはじめ各地の大名に茶道を教えた茶人。



境内全体が一つの茶席になっている。



書院から眺めた庭園



中庭



慈光院の庭



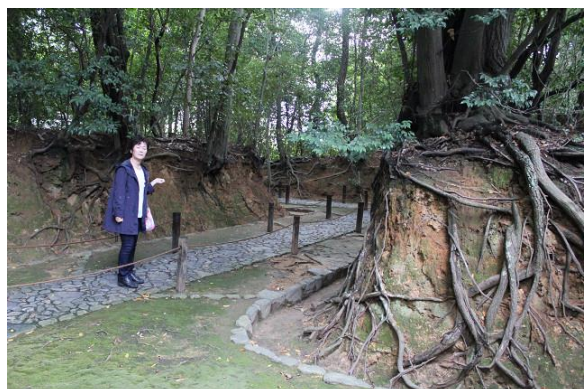
本殿の天井画は、平山郁夫画伯の下絵を元に入江正巳画伯が描いた「鳴き龍」。



摂津茨木の桜門(櫓門)を貰い受けて移築し、屋根を書院と合わせて茅葺きに変えた当院の山門「茨木城桜門」。



天井絵の下で手をたたくと「龍の鳴き声」が聞こえる。



桜門までの道

8. 薬師寺



薬師寺は、天武天皇が 680 年に発願し、持統天皇が本尊開眼、そして文武天皇の代に飛鳥の地で完成した。その後、710 年の平城遷都に伴い、現在地に移された。

当時は南都七大寺の一つとして、伽藍(がらん)(僧侶が集まり修行する清浄な場所)は、わが国一の壮美を誇っていた。



昭和 59 年に復興された中門に、平成 3 年には二天王像も復元された。



昭和 56 年に 453 年振りに再建された三重塔の西塔。白鳳時代に建立された国宝の東塔は、現在補修作業中であった。



金堂



大講堂



金堂と西塔。東塔は修繕中。



「西遊記」で有名な唐の僧侶・玄奘三蔵の頂骨の一部が奉安されている玄奘三蔵院伽藍(げんじょうさんぞういんがらん)。

玄奘三蔵院伽藍北側の絵殿には、平山郁夫画伯が玄奘三蔵求法の旅をたどるシルクロードを描いた「大唐西域壁画」が奉納されている。

1976年に薬師寺第124世管主 高田好後胤(たかだこういん)から依頼を受け、100回の現地取材を重ね、20年の歳月をかけて完成させた大作である。

高田好胤は、写経勸進というユニークな方法で金堂、西塔など薬師寺の伽藍を復興させた名物館長。

9. 唐招提寺

唐招提寺(とうしょうだいじ)は、唐僧・鑑真(がんじん)が759年に建立した仏教寺院(私寺)。井上靖の小説『天平の甍』で広く知られるようになった中国・唐出身の僧鑑真が晩年を過ごした寺。



国宝の金堂。中には像高3mの乾漆造りの三尊が居並ぶ。本尊の盧舎那仏(るしゃなぶつ、大仏)座像を中心に、左右に薬師如来立像、十一面千手観世音菩薩立像が配されている。



太鼓を設置するための鼓楼(ころう)。太鼓を鳴らすことによって、時報や、緊急事態発生の伝達などの役割を果たした。



金堂の後方にある講堂。僧侶が經典の講義や説教をする堂(建物)のこと。



ここの経蔵(きょうぞう、経典を納めておく蔵)は、唐招提寺が創建されるより前にあった新田部親王邸の米倉を改造したものといわれ、日本最古の校倉作り。

経蔵の北側にも校倉作り建物がある。これは宝蔵で、ともに国宝。

10. 平城宮跡

710年(和銅3)から784年(延暦3)まで途中の8年間除き70年間にわたり都が奈良に置かれていた。この場所が平城宮跡である。



1998年に復元が完了した朱雀門(しゅじやくもん)



2010年に復元が完了した第一次大極殿

11. 麺人ばろむ庵

11月3日。奈良に着いたこの費の昼食は、JR奈良駅の近くにある「麺人ばろむ庵」。家内がネットで見つけ、決めていた。

11時の開業時間と同時に入ったので、

この店で一番人気の新中華そばを食べる。ラーメンといえば屋台とイメージしていたのであるが、随分とおしゃれ。麺は自家製の特製麺。普通のラーメンのものとは材料がまったく異なるように感じた。



新中華そば

12. JR奈良駅



JR奈良駅



二日間宿泊したJR奈良駅の南にあるホテル日航奈良



昭和9年に竣工したJR奈良駅舎。線路の高架化に伴い、平成16年5月に曳家工事が行なわれた。エントランス中央には平城京大極殿の柱が組み立てられている。現在は、奈良市総合観光案内所となっている。

14. 古川勝三先生からのメール

11月3日12時42分にiPadに古川勝三先生からのメールが届いた。許文龍さんが秋の叙勲で旭日中授賞を受けられたというニュースであった。

許文龍(85)さんとは、財団法人奇美文化基金会会長で、ABS樹脂や電子部品などで知られる複合企業、奇美実業(台南)の創業者。李登輝元総統の支援者でもある。

昨年の7月に李登輝元総統の快気祝いのために台湾を訪問したときに、台南の奇美博物館にも立ち寄った。その際に、許文龍さんから大変ご馳走になると共にバイオリンの演奏を聞かせていただいた。許文龍さんの書かれた「台湾の歴史」は、戦前の日本人を知る上でとても役に立った。また、私が会社経営をする上でも大変参考になるものであった。

今年の秋の叙勲では、東日本大震災に巨額の義援金を寄せた台湾から3人が選ばれている。

日本企業との業務提携などを推進し、美術品を日本の美術館に無償貸与するなど日台の経済、文化交流に貢献したということであるが、東日本大震災の際に個人で6億円の義援金を寄付したことが高く評価されたのだろう。

13. あとがき

11月6日に長崎で講演をする予定が入っていたため、11月5日に大阪伊丹空港で家内と別れて長崎に入った。その夜は、OTOGIの河村泉兵衛さんや長崎龍馬会の方と一緒に食事をする約束をしていたが、それまで時間に余裕があったのでホテルで原稿を書き、高知新聞の「声ひろば」に投稿してあった。それが11月12日の朝刊に掲載された。

神様にほめられる生き方

県技術士会代表 右城猛(63)

11月3日と4日の連休を利用して奈良の世界遺産巡りをしてきた。春日大社権宮司の岡本彰夫さんが書かれた「日本人だけが知っている神様にほめられる生き方」を読んで行きたくなったのである。

東大寺、薬師寺、法隆寺、金剛力士像、千手観音菩薩像、阿修羅像などを見た。宮大工や仏師の神業とも思える技術のすごさ、そして職人としての誇りと使命感を感じた。

その夕方、奈良万葉若草の宿三笠のメニュー偽装を知った。ミシュランガイドにも紹介されているあの高級旅館三笠である。この日の観光コースの最後が若草山頂であり、旅館三笠の横を通って山頂に登った。このような高級旅館に一度泊まってみたいものだと言っていただけに余計にショックが大きかった。

台湾人がよく使う言葉に日本精神がある。「嘘をつかない」「不正なお金は受け取らない」「失敗しても他人のせいにならない」「与えられた仕事に最善を尽くす」を意味している。日本には日本精神がなくなってしまったのだろうか。神様にほめられる生き方は忘れられてしまったのだろうか。他人をだますことはできても自分をだますことはできない。

11月12日高知新聞朝刊

(2013年11月20日記)